論　文

昭和初年における海軍条約派の退潮―堀悌吉中将の失脚過程を中心として―

渡　辺　　滋

はじめに

昭和八年（一九三三）以降、それまで日本海軍の軍政面で重きをなし、ロンドン海軍軍縮条約（一九三〇年）の締結・批准を主導していた国際協調派の人びと（いわゆる「条約派」）が[1]、それに反発する加藤寛治[2]・末次信正[3]らの対外強硬派（いわゆる「艦隊派」）の策動によって、次々と現役を追われる事件が起こる。当時の海軍大臣の名前から「大角人事」と称されるこの一連の人事で、谷口尚真[4]・山梨勝之進[5]・左近司政三[6]・寺島健[7]などの人材が失われ、海軍の体力は大幅に損なわれた。

艦隊派の発言力が頂点を極めたのは、一九三三年頃である[8]。この時期、相対的に勢力を低下させる条約派が艦隊派と対峙したのが、条約派の堀悌吉の退役に関する案件である。両派がはげしい攻防を繰り広げたのは、堀を次世代の重要な才能と認識していたからに他ならない。

堀悌吉（一八八三～一九五九）は大分県の生まれ。一九〇四年に海軍兵学校を首席で卒業した後、ワシントン会議やロンドン会議での軍縮条約の締結へ積極的に関わったこともあって、艦隊派の攻撃をうけて予備役に編入された人物である[9]。彼が退役に追い込まれた際、海軍兵学校同期の山本五十六は「海軍の前途は真に寒心の至なり。如レ比人事が行はるる今日の海軍に対し、之が救済の為努力するも到底六（むつ）かしと思はる」[10]とはげしい失望の感情を示した手紙を送っているし、のちに嶋田繁太郎は「（日米）開戦時の時期に堀などが海軍大臣として在任したとすれば、もっと適切に時局を処理したのではないか」[11]と、つよい後悔の念を漏らしている。

堀の失脚は、このように海軍の行く末を暗転させる重要な出来事だった。それにもかかわらず、敗戦時に軍関係の書類の大半が焼却されたことや、戦後の風潮から軍事史研究が長く忌避されていたこともあって学界では実態解明が進まず、その分析に先鞭を付けたのは旧海軍軍人だった[12]。たとえば高木惣吉（海兵四三期）は、以下のように考察する。

> 堀中将は、（海軍兵学校の）第三十二期出身のトップにあって海軍の至宝と謳われた英才、（山本五十六のほか、）塩沢（幸一）・吉田（善吾）・嶋田（繁太郎）とともに四大将を出した逸足ぞろいの級の中心であった。…時の大臣大角岑生大将は、事大主義の張本で、昭和七年の上海事変に従軍した堀第三戦隊司令官に難癖をつけて、ついに海軍のホープとされていた山本級の首席をもぎとってしまった。[13]（傍線は渡辺による）

実松穣（海兵五一期）もいくつかの著作において同じ見解を示すなど[14]、この構図は最近まで大筋で継承され続けてきた。たしかに山本五十六・井上成美らの系譜上にある高木・実松両氏にとって、山本らが尊敬する堀を予備役へ編入した大角岑生（海軍大臣）に好感が持てないのは当然だろう。しかし高木は堀の退役当時、病気療養を経て海軍大学校教官の地位にあったにすぎず、実松は海大入学すらしていない。つまり当時の事情を後に入手した二次情報によって説明している可能性が高く、彼らの認識をそのまま史実として受け取るのは危険である。

こののち一九九〇年代に入ると、宮野・芳賀両氏の著書が発表されるなど、軍人以外の人による分析も始まってくる。しかし両氏の文章はいずれも概説的で、とくに堀の退役をめぐる分析に関しては物足りなさが否めない[15]。

こうした研究状況は、軍事史へのタブー視が払拭されていくなかで、近年までに少しづつ改善されてきている。たとえば太田久元氏は、「大角人事」を海軍中枢で眺めていた岩村清一（海軍省先任副官）の日記の分析などから、大角海軍大臣が自らの権力基盤を維持するため、伏見宮や艦隊派に「擦り寄っ」て、

条約派将官を次々と退役させる道筋を描き出している[16]。本稿ではこうした近年の研究や、『堀悌吉資料集』で紹介された関連史料なども踏まえ、堀の退役に到る過程について再検討してみたい[17]。

第一節　上海事変と堀悌吉

上海事変(第一次)は、前年の満州事変で中国世論が硬化するなか、一九三二年に上海で起こった軍事衝突である。日本海軍陸戦隊と中国陸軍の間で生じた戦闘が、日本側から陸軍三個師団を投入する大規模戦へと展開した[18]。

まずは、のちに堀を失脚に追い込む際の口実とされた、上海事変における彼の動向を見よう。堀は一九三一年十一月に海軍省軍務局長の地位を去り、十二月に第三戦隊司令官に就任し、翌年二月に野村吉三郎(第三艦隊)[19]の指揮下で事変への対応に当たる。ところがその際、中国側の守る呉淞砲台への攻撃に慎重な態度をとったことなどについて、同じ第三艦隊の植松練磨(上海特別陸戦隊司令官)や有地十五郎(第一水雷戦隊司令官)、あるいは先発して現地で対応に当たっていた第一遣外艦隊(司令官：塩沢幸一)の山県正郷(同参謀)らから、非難を浴びせられる[20]ことになる(『堀』三による)。

事変をめぐる堀の発言のみを鵜呑みにする訳にもいかないので、関連史料によって彼の証言の信頼性を確認しておこう。堀が彼の行動に非難を加えたと記録する人物のうち、まず植松は海軍省や軍令部の地位には就かず、前線で艦長や戦隊司令を歴任する純粋な武人という印象が強い[21]。そうした意味で、兵学校卒業後に在外勤務や各種学校の学生としての時期が長く、エリートコースまっしぐらの堀とは正反対の履歴の持ち主である。一方で加藤寛治とはウマが合ったらしく、植松が加藤の私邸を訪れたり、加藤が彼の講演を聴きに行ったりするような親密な関係にあるので(『加藤寛治日記』)、艦隊派のスタンスに同調する人物だった可能性は高い。

有地に関しては、清水光美(当時の人事局第一課長)が「有地第一水雷戦隊司令官が、第三戦隊の作戦振りにつきいろいろなことを言いふらし、あたら逸材を葬らしめるに至った」とハッキリ証言しており[22]、彼の堀への口撃は激しいものだったと確認できる。なお有地の立ち位置については、高橋三吉(加藤寛治の「四天王」の一人)が第二艦隊司令長官へ転任した際に参謀長として呼ばれていることなどからも[23]、艦隊派の一員と考えてよい。

山県は、上司の塩沢を盛り立てるために排斥運動に荷担したとされる(『堀』三)。こうした行動の背景は、山県の文章からも確認できる。彼は、回想録で「(海軍)部内には閥とか党派は絶対にない」と主張しつつも、塩沢とのつながりの深さに加え、加藤寛治への心情的な傾斜について詳細に述べている[24]。

このほか、堀は回顧録のなかで自身の失脚に関わった人物として、阿武清(人事局長：一九三〇年十二月～一九三三年十一月)の名も挙げている。彼は有地・植松と兵学校の同期で、おもに軍令部の第一班(のちの第一部)で活躍した人物である。海軍省における勤務経験は人事局のみで、最終的には伏見宮お気に入りの嶋田繁太郎の後任として、軍令部第一部長(軍令部のNo.3)に迎えられている(一九三五年二月)。こうした人事は、阿武が伏見宮(つきつめれば軍令部を主要拠点とする艦隊派)の意向に配慮をする人物だったことを示している[25]。人事案の下案を作製するのが人事局であることは、堀の運命を暗転させる要因となった可能性が高い(この点、別稿で詳述する)。

このように見てくると、有地を筆頭とする人びとが堀批判を繰り返したのは、艦隊派の影響下における行動と推定できる。彼らの言動のかなりの部分は、艦隊派上層部(末次信正あたり)の脚本に沿ったものである可能性が高い。

以上のような個別の事例以外に、上海事変をめぐる堀への口撃が激しさを増す背景として重視すべきは、堀と末次との間の軋轢である。堀によれば、砲術学校で教官としての末次から指導を受けた際は高い評価を受けていたが、海軍大学校で指導を受けた頃には不和が表面化し、さらに自分が末次の政敵山梨勝之進と働くようになってからは、関係悪化が決定的になったという(『堀』三)。

こうした展開の末に、堀は上海事変をめぐっても末次と不和を拡大させていた。当時、末次麾下の第二艦隊は、第三艦隊を側面援護する役割を担って上海周辺に展開していた。陸軍主力を上海へ上陸させる際、全体指揮を執った堀に対し、末次は麾下の第二艦隊からの増援を再三申し出ている。しかし堀は、こうした申し出を「邪魔ニナルコトヲ患ヒテ」、すげなく拒否したのである。堀の対応に、末次は「ヒドク失望シ且ツ恨ンデ居タ」(『堀』三)とされる。堀が帰国後に作製した「奏上書」[26]で、この上陸作戦について「精細ナル事前ノ準備ヲ整ヘ、協調ト努力トニ依リマシテ」と述べているところからも、直前になって指揮系統の異なる部隊を参加させても「邪魔ニナル」という判断は、彼にしてみれば合理的だったのだろう。しかし折角の申し出を断られた側にとっ

ては[27]、どうだったろうか。少なくとも末次は、幕僚達の前で面目を失ったに違いない。

先行研究において、堀が艦隊派から執拗に攻撃されたのは「海相に就任する可能性が非常に高かったから」で、彼が「海相に就任すれば、…「軍令系」「純軍事系」の権限縮小に直結する可能性があった」[28]からとされる。たしかに政治力学的にはそのとおりだが、こうした状況もふまえると堀と末次の間における感情的な対立が泥沼化し、そこから周囲の理性的な抑制が効果を発揮しないまま、最終的に堀の退役へと到ったという側面は看過してはなるまい。

上海からの帰国後、事変における堀の「卑怯な」行動に関しては、様々な情報が発信されていく。さらにこの年の後半になると、同様の話が堀の戦隊旗艦（那珂）の航海長の発言としても流布され始める（『加藤寛治日記』昭和七年八月十二日条）。このように広がりの一途をたどる流言に対抗して、堀はようやく重い腰を上げ、翌年、海軍省・軍令部へ「一九三三年二月三日　上海事変手記」（『堀』三）を提出する[29]。そこでは、「例之航海長之話」について「事柄を面白く淡泊に「イヤほんとに面喰ったよ」之程度之雑談が悪意に解せられて尾ひれをつけられたるものならん」と航海長をかばったうえで[30]、四項目にわたり詳細な戦況分析を示し、「爾後ノ情報や偵察の結果は、自分等の始め考へて居たことを裏切るものは一つもない」と結論づけている。これを受け取った海軍省先任副官の岩村清一（上海事変では堀の麾下で阿武隈艦長）は、堀の同期で軍令部第一班長の嶋田繁太郎（上海事変では第三艦隊参謀長）から「事情の分らぬ人がしくじってみたり、不足の智識で大言壮語したり、笑止千万。事件落着後に良く判明致させ度存居候。万事胸をおさすり下され度候」と拝受の書簡を送ってもらい、堀を安心させるように努めている。

しかし初動が遅きに失したこともあり、悪い噂は一向に静まらなかった。一九三四年一月、堀は小林宗之助人事局長[31]に事情説明をするが、小林からは「実際ハソウカモ知ラヌガ、皆ソウ考ヘテ居ラナイカラ中々六ケ敷イ」と返事される。もはや真実が意味を持たないほど、部内に噂が広がっていたのである。

こうした流言とあわせて問題視されたのが、堀が艦隊派に攻撃を仕掛けているという噂である。「石川信吾[32]来り、予に人事之決心を促す。井上成美の奇怪なる談を報ず。小林と堀の末次排斥なり」（『加藤寛治日記』昭和七年九月三日条）という記事によれば、艦隊派のなかには、小林躋造（連合艦隊司令長官）[33]と堀（第三戦隊司令官）を首謀者とする末次排斥運動が存在し、対応を誤ると加藤寛治の失脚にもつながりかねないという情報が流布していたと判明する。こうした「運動」の存在がまことしやかに語られていたことは、「竹之内[竹内]賀久治（平沼騏一郎側近）わざゝゝ来訪、予之進退に付心配す。多謝々々。…〔欄外〕例のanti運動也。小林、堀？」（『加藤寛治日記』昭和七年十月十五日条）という記事からも明らかである。これ以降、堀は加藤自身にとっての政敵と位置づけられるようになった。のちに古賀峯一（軍令部第二部長）が「堀中将ヲ加藤大将カ止[辞]メサセト言フ由」（『岩村清一日記』昭和九年三月六日条）と説明するように、加藤の圧力は堀失脚の主要因となっており[34]、石川によるご注進はその引き金となったのである。

このほか加藤には、堀をめぐる様々な悪評が吹き込まれていた。たとえば山下源太郎（元軍令部長）の未亡人について、堀が不穏なデマを広めているという噂を信じた加藤は、四竈孝輔[35]から「（堀は）決シテ左様ノコトヲスル人デナク、又ソンナコトヲスル筈ガナイ」とたしなめられている（四竈から堀への談話、『堀』三）。こうした流言によって、かつて「特ニ親シクシテ居タ」（『堀』三）はずの加藤の堀への印象は、加速度的に悪化していく。

一方で、部内には堀を援護する動きもあった。たとえば海兵同期の山本五十六は一九三四年九月「軍令部総長宮ニ言上覚」を提出し、堀を現役に留めるように意見具申し、同じく同期の嶋田繁太郎を介して伏見宮から「人事ノ公正ニ就テハ深ク考ヘ居ルニ付、安心シテ貰ヒタシ」との返答を引き出している。嶋田自身も、軍事参議官や人事局長に申し入れを繰り返すほか[36]、堀に対して「俺モ殿下ニ申上ゲヲ工作中ダ」（『堀』三）と述べている（この点、後述する）。しかし、こうした動きですでにできあがりつつあった大きな流れを押しとどめることはできず、氾濫する誤情報は次第に堀の予備役編入への道筋を作り上げていく。

なお堀を失脚させるに当たり、どうして艦隊派は上海事変における彼の「卑怯」な態度を延々と非難し続けるばかりで、「軍縮会議での堀の態度に問題があった」などと主張しなかったのかといえば、手続き上は条約派の方に分があったからである。条約の締結から批准に至る過程で、艦隊派は一旦了解した事案を後になって反故にするような無計画な対応を繰り返している。この点、どの様に抗弁しても、詰め将棋のように手続きを進めている条約派の論理には歯が

立たない。そのため、江戸（ロンドン）のかたきを長崎（上海）で討つような方策を採らざるをえないのである。

艦隊派の面々にしても、自分たちの主張が虚偽を含んでいるという自覚はあったらしく、軍縮条約に関する一連の手続きが終了した後、さまざまな手を使って海軍省側に保管されている都合の悪い書類を廃棄させようとしている[37]。つまり一連の経緯を知っている堀が現役に止まっていることは、それ自体が艦隊派にとって脅威だったのである。

第二節　堀悌吉をめぐる進級と異動

軍人の地位は、階級と官職からなる。当時の日本海軍において、このうち階級の変更・退役（予備役編入）に関しては「進級会議」で[38]、官職の異動に関しては「将官会議」[39]で議されることになっていた。いずれも人事局案から作製された大臣原案によって検討されるが、事前の厳密な調査と各部署における調整を経た案を、会議の出席者へ人事局長が丁寧に説明するという手順をとるので、会議の場で変更されることは少なかったとされる[40]。以上の前提を確認したうえで、堀の人事について見ていこう。

まず堀が退役に到る過程を概説しておくと、軍務局長（一九二九年九月～）→第三戦隊司令官（一九三一年十二月～）→第一戦隊司令官（一九三二年十二月～）→軍令部出仕（一九三三年十一月～）→鎮海要港部司令官代理（一九三四年七月～十月）→人事内報（同年十月）→待命・予備役編入（同年十二月）となる。このうち第一戦隊は、第一艦隊司令官（あるいは連合艦隊司令長官）の直率となる時期が多いので職務は少なく、普段でも「比較的閑職ト見做サレテ」いた（『堀』三）。しかし、これはこの年の七～八月にかけて堀が急性虫様突起炎で入院したことによる処置と考えられ、左遷とはいえない[41]。

このなかで、まず検討すべきは「軍令部出仕」（一九三三年十一月～）だろう。先行研究では、一九三三年十月二十六日の進級会議で堀の退役が決まり、それが「軍令部出仕」という形で通知されたとする見解が一般的である[42]。同時に発令された中将昇進も、待命昇進（退役前提の昇進）と理解するのである。しかし、堀のように一年以上に渡って、それも病気療養や待命休職ではなく「軍令部出仕」のまま現役に止まる事例は、管見の限り確認できない[43]。こうした異常性について、先行研究では十分に注目されているとは言いがたい。

同時期に予備役編入された条約派将官の事例では[44]、たとえば左近司政三（鎮守府長官）の場合、一九三三年十一月十五日に軍令部出仕とされ、翌年三月二十六日に待命、同三十一日に予備役ということで出仕から予備役まで約四ヶ月、待命から予備役までは六日である。寺島健（艦隊司令長官）の場合、一九三三年十月三日に軍令部出仕とされた後のスケジュールは左近司と同じで、出仕から予備役までは六ヶ月ということになる（ちなみに堀自身も、待命から予備役編入までは五日しかない）。これらの事例は、いずれも人事局の内規[45]に沿った処置となっている。たとえば左近司（中将）は佐世保鎮守府長官、寺島（中将）は練習艦隊司令長官なので、（1）項が適用される。年度末で退役としたのは、（3）項の準用だろう。ところが第一戦隊司令官として（3）項が適用されるはずの堀は、年度末までに退役しなかったどころか、結局、十三ヶ月にわたり現役に止まり続けている。つまり少なくとも一九三三年の段階において、堀の「軍令部出仕」は待命を前提とした発令ではなかったし、中将昇進も待命昇進ではなかったと考えるべきである。

実は「軍令部出仕」という処置は、必ずしも退役の前段階を意味するわけはない。たとえばこの人事を発令した大角自身も、ちょうど十年前の一九二四年十二月一日に第三戦隊司令官（少将）から中将に昇進したうえで軍令部出仕となっている。これが今回の堀に対する処置と全く同じなのは、注目する必要があろう。大角はその後、四ヶ月間に渡って、出仕のまま「軍縮会議に関する調査事項の処理」に関わった後、海軍次官に就任した[46]。おそらく大角には一九三三年の人事で堀を予備役に編入するつもりなどなく、「出仕」の両面性（退役までの待機期間という側面と、次の官職任命までの待機期間という側面）を利用して、堀の退役を当然視する艦隊派の圧力をいなしたのである。

この段階で、大角に堀を予備役へ編入する意思がなかったことは、左近司政三が四代前の海軍大臣ですでに現役を退いていた財部彪大将に対して行った現状説明からも窺い知ることができる。このなかで、左近司は「谷口、寺島氏ノ引退ノ止ムナキニ至リタル事情ヤ、堀少将ノ進退ハ尚ホ大臣ノ考慮中ナリ」（『財部彪日記』昭和九年一月十六日条）と語っている[47]。左近司や財部も、堀をめぐる人事が条約派にとっての最終防衛ラインと考え、その動向に注視しているのである。結局、翌年の三月を過ぎても退役しない堀を見て、軍令部の権限を拡張した「省部業務互渉規程」の改正（一九三三年）以降も、将官人事につい

ては大臣の専決事項であることを[48]、加藤は再認識したに違いない。

そもそも、艦隊派からの要求を受けて大臣の判断で条約派将官を予備役編入する場合、通常は何らかの形で加藤へ事前通知されている。たとえば左近司の事例では、高橋三吉（軍令部次長）を介して「左近司之処分内定」（『加藤寛治日記』昭和八年八月二十八日条）との情報が伝えられている。寺島の事例では、大角自ら「寺島を病気とする事に既に内命ずみ」と「交迭」に関する説明をしている（同年九月二十七日条）。これに対し堀の事例では、そうした形跡はまったく確認できない。つまり大角は堀の退役に関して、この段階で加藤に何らの言質も与えていないのである。それどころか、この後、一九三四年七月には堀を鎮海要港部司令官代理に任命し、三ヶ月にわたって勤めさせている。大演習中の臨時代理とはいえ、要港部司令官は中将級のポストであり、堀が待命中ではないことを周囲に明示する効果は十分にあったに違いない。

こうしてみると、堀の受けた「軍令部出仕」という辞令は、大角大臣にとって艦隊派の鋭鋒をそらすためのギリギリの選択だったと分かるが、このような不安定な立場に一年以上も置かれた堀にとっては、厳しい状況が現出する。この頃までには海軍部外にも堀の政治的な窮状は知られ始めていたらしく、堀自身は自らの状況について家族に何も話さなかったにもかかわらず、妻千代子は「心配ノ余リ強イ神経衰弱症」を発症している。

またこの年の人事において、艦隊派も黙って引き下がったわけではない。最終的に堀へ下された処置（中将昇進のうえで無役）は、堀の支持者たちにとっても期待を裏切る結果だったのである。実は一九三三年の人事異動で、堀は軍令部第一部長に就任する可能性があった。吉田善吾（堀の同期）によると、「此の際君を軍令部第一部長に推してはどうかといふ動きがあり、君自身も進んで之に応ずる積であった」という[49]。吉田は軍令部第二班長（この頃の第二部長に相当）経験者で、当時は海軍省軍務局長の地位にあった。

当時の軍令部第一部長は、堀と同期の嶋田繁太郎だった。それも一九三二年十一月に就任したばかりで、人事案を編成していた時期には在職数ヶ月という状況である。通常、部長職は二年は勤めるポストであり、このような短期間での退任は異例といわざるをえない。こうした条件を念頭に置くと、嶋田自身が納得ずくで積極的に後押ししているプランと考えざるをえない。実現すれば、艦隊派の牙城たる軍令部の№3に堀を押し込むというアクロバティックな処置だが、当時の第二部長は古賀峯一（堀の親友）であり、現実性は十分ある。うまくいけば、両派の融和につながる可能性もあったのではないか。

結局、一九三三年の進級会議・将官会議の結論は、堀を中将に昇進させたうえで第一戦隊司令官から更迭する（＝無役）というものだった。相当な意気込みで運動を進めていた堀支持派の不満は激しく、早速、吉田軍務局長は堀自身を海軍省に呼び出したうえで、古賀第二部長（軍令部）・岩村先任副官（海軍省）も情報を持ち寄り、この人事の背景を分析している。その結果、阿武人事局長の強い意向が働いて、このような結論に至ったという構図が見えてきたらしい。詳細は別稿で分析するが、参考までに『岩村清一日記』一九三三年十一月七日条を挙げておこう。

吉田少将ノ依頼ニテ、古賀少将ノ所ニ行キ、堀少将・吉田少将ト会見。進級会議ニ於ケル堀少将ノ件ニツキ話ヲキク。
帰宅後熟考、人事局長宅ニ行キ強云。

堀が「回顧録」で「人事局長ヲシテ居タ阿武ガ末次ノ意ヲ承ケテ種々画策シテ居タ」（『堀』三）と述べるのも、この際の分析を元にした結論だろう（当時の堀は無役なので、自力で高度な人事情報は入手できなかったはずである）。こうして一九三三年末には収まりのわるい状況が現出したが、まだまだ巻き返しの余地はあるというのが、堀支持派の見立てであった。

ところで同期の嶋田繁太郎が堀に「俺モ（伏見宮）殿下ニ申上ゲヲ工作中ダ」と述べたのは、翌年のことである。嶋田の活動も、こうした堀擁護の動きの延長線上に位置づけるべきものだが、その「工作」内容を考えるに当たっては、同期の塩沢幸一の談話（一九三四年夏頃）が参考になる。そこには「小林（人事局長）ニ様子ヲ聞キ、且ツ吉田（軍務局長）カラ聞イタ話ヲシタラ、小林ガ「ソンナコトヲシテハ、殿下ハ非常ニ困ラレルダロウ」ト云フノデ、早速嶋田ニ其ノコトヲ通知シタガ、嶋田ハ怜悧ダカラ直グ殿下ニ「堀ノ件デ申上ゲタノハ取消シマス」ト申上ゲテシマツタ」（『堀』三）とある。

ここからすると、嶋田の「工作」内容は、伏見宮（軍令部総長）を「困」らせるような内容であったことが判明する。単に「堀を退役させないで下さい」という程度の嘆願であれば、すでに山本五十六も行っているし（前述）、宮を困らせることにはなるまい。ここで事前に人事局長のアドバイスが求められているところを見ると、堀に関するかなり具体性を帯びた人事上の要望だった可能性

が想定される。海軍省・軍令部において、中将級のポストは数少ない。省・部の長を除けば、海軍次官・軍令部次長・艦政本部長・航空本部長の四つくらいだろう。このうち会話の主である塩沢自身が当時の航空本部長の地位を占めていたことを、偶然とは考えにくい。おそらく昨年に引き続き、堀の同期生たちは自分たちのポストのうちで堀に相応しいものを供出することで、彼を窮状から救い出そうとしていたのである。

なお小林人事局長の反応については、ポストを失う塩沢自身が気乗りしない態度を示していた可能性もあるとはいえ、堀の同期生たちの人事への介入に違和感を感じた小林人事局長が「ソンナコトヲシテハ、殿下ハ非常ニ困ラレルダロウ」と婉曲に反対の意を示したと考えるのが妥当である（詳細は別稿を参照）。これを受けて、「嶋田ハ怜悧ダカラ直グ殿下ニ「堀ノ件デ申上ゲタノハ取消シマス」ト申上ゲテシマツタ」というのが塩沢の堀に対する説明だが、嶋田自身は、このほか「御縁故の深かった軍事参議官に人事の公正と堀君在職の切要を申入れ、又塩沢君と共に人事局長にも同様の申入をした（九月十三日）」（『追悼録』）という。のちに大臣・総長を務めていた時期とは異なり、「怜悧」な嶋田にしては驚くほど熱い活動で、心の底から堀の将来を心配している様子が分かる。

以上のような経緯をふまえると、本稿の冒頭で紹介した「堀などが海軍大臣として在任したとすれば」という嶋田による戦後の回顧は、より深みを帯びてくる。おそらく、晩年の嶋田は「あの局面で自分がより適切な行動をとっていれば、堀は海軍大臣まで登り詰めたはずだ」と考えていた。大臣在任中の嶋田自身に向けられた悪評を意識しつつ、最適任者とはいえない自分が海軍のトップを務め続けねばならなかった状況への後悔も込めた述懐なのだろう。

第三節　条約派への圧力

このように紆余曲折はありながらも、一九三三年の人事において堀は首の皮一枚で現役に残ることに成功した。これは、艦隊派が大臣に圧力を掛ける際の各種「装置」が、すこしずつ機能しなくなりはじめていた状況とも関係している。

条約派将官の異動・退役人事について、艦隊派の圧力によって大角海相が受動的に行ったという理解は、既に定説化している。そして艦隊派が大角に圧力を掛ける際、もっとも効果を発揮した装置が東郷平八郎元帥や伏見宮軍令部総長であったことも、共通認識となっている。しかし、それらの「装置」がどの人事において機能を果たしていたのか、あるいは圧力を受ける大角側に何らの主体性もなかったのかなどの点に関しては、十分に検討されていない。そこで以下、堀をめぐるやりとりについて、これらの点を考察しておきたい。

まず確認したいのは、東郷元帥などを艦隊派の代理人に仕立て上げていた主体である。「末次信正はずるいんだから、こっちもそのつもりで相手にするほかなかった」（『岡田啓介回顧録』）・「東郷元帥の言はれること…ほとんど用語まで前軍令部次長の末次中将の言ってゐることと全然同じであって、実に行きわたつて自分達の考を徹底的に老人連中に染込ましたものだ、と驚かされた」（原田熊雄『西園寺公と政局』一巻一一〇頁）などの証言によれば、東郷元帥の強硬な主張の背後にいた脚本家は末次信正と考えられる。

この時期、艦隊派総帥の加藤ですら、末次の傀儡と化していた[50]。一九二九～三〇年頃には、「加藤軍令部長も末次次長の休んでゐる間は大変おとなしいが、末次が出て来るとまた喧しくなって来る。結局末次が加藤軍令部長を操ってゐる」（原田熊雄『西園寺公と政局』一巻六三頁）・「当時末次氏ハ鼻孔出血デ時々休ンダコトガアルガ、其ノ間ニ加藤軍令部長ガ納得シテ、丸ク納マリカケテ居タ事柄ヲ末次次長ガ出勤スレバ直ニ変更セラレ紛擾ヲ起ストイフ如キ事実ハ一再ニ止マラナイ」（『堀』三）という状況になっており、これ以降、艦隊派の主張なるものが、末次一人の頭から出ている可能性も想定される。

つぎに、この末次が操っていた「装置」の機能について見ておこう。まず東郷元帥だが、大角はかつて東郷の副官を勤めており、東郷も大角が出世する過程で助力を惜しまなかったとされる[51]。そうした関係もあって、「東郷元帥の発言にて大角大に弱る」（『加藤寛治日記』昭和八年十月十六日条）のように、大角の東郷への弱腰の対応は目立った。当時の東郷は進級会議に臨席したり、人事に関する大臣原案に口を出したりするなど、介入が多かった。老齢から次第に体調を崩し、一九三〇年を最期として進級会議には列席しなくなるとはいえ（『加藤寛治日記』昭和六年十月二十九日条）、晩年にも側近を通じて人事への介入を続けていたらしい。たとえば山梨勝之進の退役人事の過程では[52]、「小笠原来訪。東郷元帥へ山梨之件詳細御話せる旨伝ふ」（『加藤寛治日記』昭和七年三月十六日条）・「小笠原と電話。（伏見宮）殿下より山梨問題に付東郷の意見を開けと仰を受け復命の件也」（同四月九日条）などとあるように、東郷側近の小笠原長生[53]と加藤の間で実質的な調整が進められている。しかし東

郷は一九三三年に喉頭がんが発覚し、翌年五月に死去しているので、一九三四年秋に議された堀の退役人事に関しては直接関与していない。この時期に段階的とはいえ海軍部内において東郷の発言力が低下していく状況は、堀支持派にとって僥倖と受け取られたことだろう。

つぎに、伏見宮について。堀の退役に関しては、伏見宮の圧力を重視する見解も少なくない。そうした分析の根拠は「軍令部総長宮が、…堀悌吉少将までも辞めさせようとするやうな空気がある、といふことを、小林大将から自分は直接にきいた」（原田熊雄『西園寺公と政局』三巻一七三頁）・「小林大将ハ「僕ハ堀君ヲヤメサセルト主張スル本源ハ殿下ニ在ルト思フ」ト云ッテ居タ」（『堀』三）などのように、いずれも条約派の小林躋造の発言である[54]。これに対し、「古賀少将ヨリ堀中将ヲ加藤大将カ止メサセト言フ由。主ナ原因ハ呉淞砲台事件ナリ。（伏見宮）殿下ハ差迄思ハスト」（『岩村清一日記』一九三四年三月六日条）という史料などを根拠に、伏見宮の関与の薄さを主張する見解もある[55]。たしかに一九三四年夏、山本五十六が堀の失脚を防ごうと伏見宮へ意見書を言上した際、「殿下は兼々退職問題には関与遊ばされない事にしておられる」との反応だったことは[56]、そうした想定の蓋然性の高さを裏付けている。実際に、この時期の伏見宮が「退職問題」への関与を避けていたらしいことは、たとえば寺島中将の退役に関する「海相と会見、小林、寺島問題を報告せらる。殿下御同意ならず、只大臣が決意するなれば強て留めず」（『加藤寛治日記』昭和八年九月二十七日条）という記事からも確認できる。条約派将官の異動人事に関してはさまざまな関与も認められる伏見宮だが[57]、一九三四年段階における堀の退職人事に積極的な関与はしていないと考えた方がよかろう。

第四節　一九三四年の人事における堀の退役

こうしてみると、東郷元帥が死去し、伏見宮は人事に積極介入しなくなった状況下、大角海相を押し切って堀の退役人事を実現させたのは誰かということになる。この点に関しては、既に指摘されている通り[58]、加藤寛治と考えるべきだろう。結論からいえば、ロンドン軍縮条約の調印・批准の過程で財部彪・岡田啓介らが現役を去り[59]、その後の条約派一掃人事のなかで谷口・山梨なども現役を追われた結果、一九三四年秋の段階において、現役最先任の大将である加藤の勢威を、大角は抑えきれない状況が現出していたのである。以下、こうした状況下における人事について検討しておこう。

一九三三年の進級会議は十一月二～四日に開かれ、三四年は十月二十六日に開かれた。このうち三三年は、中将昇進にともなう第一戦隊司令官（少将相当）解任という結論で、無役になったとはいえ堀にとって不利益ばかりではない。

これに対し三四年は、予備役編入という決定がなされており、明確にスタンスが異なっている。こうした違いは、ひとつには両年における会議の主要メンバーの違いによっていた。三三年の進級会議では、大角・伏見宮のほか三名の艦隊司令長官（小林躋造・末次信正・今村信次郎）と三名の鎮守府司令長官（野村吉三郎・中村良三[60]・左近司政三）などが審議した。その内訳は、いまだ条約派（傍線）と艦隊派が拮抗する割合となっている。とくに上海事変の際の上司（野村吉三郎）が出席していたことは重要で、この件で堀を退役に追い込もうとする戦略は、野村の対応によって十分な効果を発揮しなかっただろう[61]。一方、三四年の進級会議では、大角・伏見宮のほか三名の艦隊司令長官（末次信正・高橋三吉・今村信次郎）と三名の鎮守府司令長官（永野修身・藤田尚徳・米内光政）が審議した。左近司が予備役に編入され、小林躋造・野村吉三郎も軍事参議官に退いた結果、艦隊司令長官は艦隊派が占め、鎮守府司令長官からも明確な条約派はほぼ姿を消している（永野は艦隊派よりのスタンスであろうし、藤田・米内[62]は中立派と考えるべきだろう）。

このように勢力バランスの変化した一九三四年の進級会議において、堀の退役が決定される。ただし、その過程は必ずしも艦隊派の思惑どおりではなかった。当日のことを、加藤は「最高進級会議、堀、坂野[63]問題決す。枝原、市村、鈴木引退、気の毒也」（『加藤寛治日記』昭和九年十月二十六日条）と記している。この記事によれば、枝原百合一（三一期）・市村久雄（同）・鈴木義一（三二期）の三中将が、堀と同時に退役処分となったことが分かる。彼らは『加藤寛治日記』の常連で、いずれも艦隊派の与党と考えられる。とくにこの三人のうち、枝原は兵学校三一期を首席で卒業した人物である[64]。兵学校の卒業席次が大きくモノを言った海軍人事において、この年齢で予備役に編入されるはずの人物ではない[65]。前後の期の事例を確認しておくと、三〇期首席の百武源吾は、大将まで昇進して六〇歳まで現役に留まっている。また三三期首席の豊田貞次郎は大将に昇進して五六歳で退役するが、政界に進出し外相・商工相・軍需省などを歴任している。枝原にしても、将来を嘱望されていた身だったはずである。

加藤が枝原を筆頭に挙げて退役を「気の毒」と悲しむのも、そうしたあり方を念頭に置いたからであろう。

一回の人事で兵学校を首席で卒業した人物を複数同時に、それも五十代前半のうちに退役させるという人事は、海軍の歴史のなかで他に例がない。つまり枝野と堀の同時退役には、艦隊派と条約派が三一期・三二期のエースを喧嘩痛み分けの形で同時に手放す決断だったという側面も見いだせる(66)。とすれば艦隊派が進級会議を寡占するこの時期に至っても、いまだ両派のバランスという観点は、ある程度、配慮されていたことになる。

なお一九三四年の進級会議で退役が決まった将官(発令は十二月と翌年三月に分割)は中将一五名・少将一三名にのぼるが、中将級のうち機関科(三名)と中将が最高位の将校相当官(軍医二名・造船一名)を除くと、三一期の市村久雄・枝原百合一、三二期の鈴木義一・新山良幸・野辺田重興・堀悌吉・和田信房、三三期の有馬寛・坂野常善の計九名になる。この結果は、塩沢幸一(堀の同期)の「一九三四年十月九日付書簡」(『堀』三)で「我等の附近にありて危険界にありと認めらるゝもの枝原・市村・小野・和田・鈴木・野辺田・新山・有馬・在塚(后の五名は中将に進級の上)に有之候」と述べているのと、ほぼ一致する。実際には「我等」(堀・塩沢)のうち塩沢は退役を免れ、そこに杉・坂野を加えた人びとが退役することになったとはいえ、的中率には目を見張る(おそらく十月上旬段階の人事局案が、小林人事局長から塩沢へと漏れていたのだろう。両者の関係について、詳細は別稿を参照)。

さて大角が進級会議の結論を堀へ通知したのは、十月三十日のことである。当日の様子について、堀は以下のように述べている。

例年鴨猟ノトキニ、大臣カラ離現役ノ内報ガアルコトニナッテ居タガ、其ノ年モ越ケ谷ノ御猟場デ大角大臣ハ自分ニ対シテ「君ハ此度ヤメテモラウコトニナッタ。特ニ色々御世話ニ成ツテ居ナガラ最後マデ「サッポート」出来ナカッタノデ何トモ申シ様ガナイ」ト云ッテ居タガ、大臣ハ当ノ責任者デアル。イクラ大角氏ノ言フコトニシテモ「サッポート」ハ変ダト思ッタガ、前ノ話モアルノデ思ヒ当ル。此ノ日大角氏ハ大ニ酩酊シテ芝生ニ放尿シナガラ歩キマワル等ノ醜態ヲ演ジタ。

この記事から、堀が大角の不甲斐なさに呆れ気味なのは分かるが、怒りや憎しみは見いだせない。『回顧録』のなかで、おなじ条約派将官の寺島健まで非難する堀が(67)、自分を予備役編入した大角を非難しないのはどうしてだろうか。おそらく堀は、大角が水面下で堀の失脚を阻止するために色々と努力してきたことを認識していたのである。

こうした視点に立った場合、注目されるのは当日の大角の精神状況である。主要な将官を集めた人事発表の場で、大臣が「大ニ酩酊シテ、芝生ニ放尿シナガラ歩キマワル」というのは尋常ではない(68)。この日の会では「大角大に酔ふ。其他大に乱る。依て殿下に奉レ対不敬を恐れ御退場を奉願」(『加藤寛治日記』昭和九年十月三十日条)とあるように、誰から見ても大角は大荒れの状態だった。これは勿論、当日までの人事決定のプロセスで彼が艦隊派の有力者たち(とくに加藤)から受けたストレスによると考えられよう。

大角がこれほどのつらい思いをしてまで堀をかばったのは、大角が第二艦隊長官だった時期(一九二八年十二月～二九年十一月)、堀が参謀長(一九二八年十二月～二九年九月)として支えた関係による。当時、大角は堀の退役について、「自分が第二艦隊司令長官のとき、有為の参謀長であった堀君…に海軍現役をやめて貰うことは誠に残念である」(69)と、涙ながらに語ったという。

堀の回顧録によっても、大角の堀への好意はさまざまに確認できる。たとえば上海事変の件で窮地に追い込まれた堀に対し、大角は「御心配無用、其ノ辺ノコトハ自分ガ一番ヨク知ッテルカラ」と述べているし、山本五十六が伏見宮に堀の件で直訴した際のことについて、反応が良好だったと報告された大角は「「殿下ガソウ云ハレタカ、ソレハヨカッタ」ト嬉シ相ニ云ッテ居タ」とされる。

大角の「醜態」は、堀を救えなかった自身の不甲斐なさへの悔恨や、堀への申し訳なさから生じたもので、堀はそうした大角の姿を見て非難を差し控えたと考えるのが妥当だろう。この頃を境に、大角の艦隊派への姿勢がようやく強腰になってくることと、この際の大角の後悔に満ちた態度が無関係とは、私には思われない。

第五節　一九三六年　艦隊派の崩壊

こうして堀を退役に追い込むことで、めぼしい条約派将官を一掃した艦隊派だったが、思わぬことから足をすくわれる。最期に、この点に触れておきたい。

一九三六年に入ると、『加藤寛治日記』には艦隊派と伏見宮(軍令部総長)との関係が変化しつつあることへの焦りがみえるようになる。たとえば「大角の

（伏見宮への）懐柔を憂ふ。…何事も大角にと云ふ結果になれり」（昭和十一年二月二十二日条）とか、「大角の喰込み甚しきに驚く」（昭和十一年三月十三日条）とか、「殿下の御態度変化」（昭和十一年三月二十三日条）といった具合である。しかし艦隊派の地歩が低下してきたのは、伏見宮への「大角の懐柔」・「喰込み」によるというより、彼ら自身の戦略的な失敗が大きい。

大臣就任三年目に入った大角が艦隊派と異なる方向性を明確にしつつあるなか、自らが予備役に編入される可能性を危惧する末次は、揮毫依頼という口実(70)で加藤の元を訪れ（『加藤寛治日記』昭和十一年二月三日条）、おそらく窮状を訴えたうえで、さらに二日後には同志の竹内賀久治(71)を加藤の元へ派遣し（同五日条）、末次の窮状に関する加藤の所見を問いださせた。すでに前年十一月に退役していた加藤にとって、末次の退役は自派の退潮を決定的にしかねない問題と認識されただろう。加藤の言質を取った竹内は、早速、関係者に対して「加藤大将ノ意見…、此ノ儘ニテ進マバ、海軍ニ於テモ末次等整理セラル。仍テ（伏見宮）殿下ニ進言シ、御退職ヲ願ヒ末次ヲ軍令部総長ニ推サン」（『真崎甚三郎日記』昭和十一年二月六日条）と地ならしを始めた。加藤自身もその方向で活動を始め、日記に「殿下御進退」に関する記事が見えるようになる（『加藤寛治日記』昭和十一年二月二十二日条・同三月十一日条）。

しかし、こうした唐突な動きに伏見宮は強く反発したらしい。驚いた加藤は、早速「殿下に極諫せんとす。…昨夕予より拝伺を願出し」（『加藤寛治日記』昭和十一年三月十一日条）と説得を試みたが、「本日殿下より御召し無し」（同三月十二日条）、「御進言を中根（直之助…宮付きの職員）に托す」（同三月十三日条）とあるように、面会自体を拒否され、これ以降、ほぼ関係を絶たれてしまう。当初、加藤はこうした対応を一時的なものと考えていたらしく、面会が拒絶された以降も「殿下御実力過信」（同三月二十三日条）などと危機感の不足する感想を永野修身（新任の海軍大臣）に述べていた。しかしこの後も伏見宮の怒りが続いていたことは、一九三七年一月十四日に山本五十六（新任の海軍次官）が、「自分のあとは末次には譲らん」（『西園寺公と政局』五巻二二八頁）という伏見宮の発言を紹介していることからも確認できる。

こうした伏見宮への辞職の働きかけや、二・二六事件（一九三六年二月）の勃発に伴って注目されるに到った極右勢力と艦隊派とのつながりは、伏見宮の加藤・末次らに対する不信感を決定的にした(72)。一九三六年三月には中村良三大将・小林省三郎中将らをはじめとする艦隊派の主要メンバーが続々と予備役に編入されたり左遷されたりしていくが、こうした危機に際して伏見宮への影響力を失っていた加藤には、まったく打つ手がなかった(73)。末次信正・石川信吾らは予備役編入を免れるが、艦隊派は大幅に勢力を失い、派閥としての実体を解消することになる。同年十二月に、堀の路線を継承する山本五十六が海軍次官に就任するのは、おそらく偶然ではない。振り子は、ようやく揺り戻しはじめたのである。

おわりに

かつて一九三〇年のクラス会において、山本五十六は「おれ等のクラスで大将になるのは堀一人だけだよ。吾々はをそかれ早かれ皆首になるよ」と演説した(74)。しかしその予言は当たらず、堀は四年後に中将で海軍を去ることになる。官職では海軍大臣二人・連合艦隊司令長官二人、階級では元帥一人・大将三名という史上例のない逸材揃いのクラスで抜群の英才と謳われた堀悌吉が、その後、才能を全力で生かす局面にあうことはなかった。

本稿を締めくくるに当たって、退役後の堀の活動を簡単に確認しておこう。海軍の斡旋をうけて軍需関係の会社に再就職した彼は、公には「海軍ノ指定工業ニ従事スルモノデアツタノデ、軍当局ノスルコトニ対シ、批判ニ亘ル積極的ノ言動ハ差控ヘネバナラナイ」立場に置かれていた。ところが親友山本五十六の戦死（一九四三年）に直面した堀は、それ以降、部内の現役将校達と交流を持ち、終戦に向けてのロードマップ策定などに関して一定の影響力を行使するようになる(75)。

戦後は会社を退職して年金生活に入るが、いくつかの公的な役割も果たしている。たとえば幣原内閣が戦争の原因・実態究明を目的に設立した戦争調査会は(76)、一九四六年七月にロンドン軍縮条約に関する堀の講演を実施し、それに対する質疑応答も行っている(77)。このほか、野村吉三郎の「新海軍再建研究会」（いわゆる野村機関）に顧問として参画したことも注目される。顧問は山梨勝之進・小林躋造など開戦前に第一線を退いた大将級の将官で組織されており、中将級からの参加は左近司・堀の二名のみである。当時の再軍備計画は、野村や山梨を軸に進められており(78)、そこに堀の関与も求められたのである。

この組織は、海上自衛隊の発足に深く関わるY委員会へと発展的に解消する。

当時の堀の活動でもう一つ注目されるのは、吉田茂首相の顧問組織への参加である。吉田は再軍備に関するアメリカとの折衝の前提として、日本側のスタンスを検討する会合を計画していた。その際に旧海軍の代表として、堀が選抜されたのである。会合は外相官邸で数回に渡って行われ、一定の成果を上げた(79)。たとえば「堀田正昭氏ニ申入シ覚書」(『堀』三)は、その過程で作製された再軍備に向けての私案と考えられる。

こうしてみると、結果的にではあるが、堀の早すぎる退役は人材の保全(=戦争責任からの除外)という効果を生んだと評価することはできる。自身としては不本意だったろうが、堀は一九三〇年代に失脚したことで、親友山本の戦死を看取れたのと同様、日本海軍の再建作業に関わることになった。死に際しての叙勲を宮内省から拒否された加藤寛治や(80)、昭和天皇に忌避されていると知ったショックで死去した可能性も指摘される末次信正などと比べて(81)、存在意義を認められた晩年といえるのではないだろうか。

(1) 両派の対立については、たとえば秦郁彦「艦隊派と条約派―海軍の派閥系譜―」(三宅正樹編『軍部支配の開幕』第一法規出版、一九八三年)などを参照。

(2) 伝記編纂会編『加藤寛治大将伝』(同会、一九四一年)・伊藤金治郎『生きてゐる快将 加藤寛治』(昭和書房、一九四二年)・邦枝完二『加藤寛治大将』(鶴書房、一九四四年)・伊藤隆「加藤寛治と「加藤寛治日記・関係文書」」(『近代日本の人物と史料』青史出版、二〇〇〇年、初出一九七〇年)・酒井景南『英傑加藤寛治―景南回想記―』(ノーベル書房、一九七九年)・伊藤隆ほか編『海軍 加藤寛治日記』(みすず書房、一九九四年)・相沢淳「『岡田啓介日記』と『加藤寛治日記』―ロンドン海軍条約締結をめぐる葛藤―」(黒沢文貴ほか編『日記で読む近現代日本政治史』ミネルヴァ書房、二〇一七年)を参照。

(3) 伊藤隆「艦隊派総帥末次信正」『昭和期の政治 続』山川出版社、一九九四年、初出一九七六年・秦郁彦「末次信正」『昭和史の軍人たち』文芸春秋、一九八二年。

(4) 池田敏郎『百術一誠―谷口尚真 海軍大将の生涯―』私家版、二〇〇一年・武部健一『条約派提督 海軍大将谷口尚真』カゼット出版、二〇一〇年。

(5) 山梨は、加藤友三郎以後の条約派の中心人物である。彼に関しては、山梨勝之進先生記念出版委員会編『山梨勝之進先生遺芳録』(水交会、一九六八年)・山梨勝之進『歴史と名将―戦史に見るリーダーシップの条件―』(毎日新聞社、一九八一年)・平川祐弘『平和の海と戦いの海』(新潮社、一九八三年)・橋口収「忘れられた海軍大将・山梨勝之進」(『饒舌と寡黙―愚痴の随想―』サイマル出版社、二〇〇〇年)・中村悌次「山梨勝之進先生を偲んで」(『波涛』二七―五、二〇〇二年)・工藤美知尋『山梨勝之進―忘れられた提督の生涯―』(芙蓉書房出版、二〇一三年)などを参照。

(6) 現役時の活動に関しては、松野良寅「山梨勝之進と左近司政三」(『海は白髪なれど―奥羽の海軍―』博文館新社、一九九二年)、左近司政三証言(水交会編『提督達の遺稿 上』水交会、二〇一〇年。以下『提督』と略称)を参照。

(7) 寺崎隆治編『寺島健伝』寺島健伝記刊行会、一九七三年・伊藤金次郎「恨めしき「倫敦旋風」」『陸海軍人国記』芙蓉書房出版、一九八〇年、初出一九三九年。

(8) この頃、たとえば条約派の野村吉三郎は「今日、加藤、末次といふところは有頂天になってゐるから、この反動は必ずその内に来る。いつまでも今日のやうな状態ぢやあないから、さう心配したもんぢやあない」と述べている(『西園寺公と政局』三巻三二二頁)。

(9) 堀悌吉に関しては、平川祐弘「軍人の栄辱」(『西洋の衝撃と日本』講談社、一九八五年、初出一九七三年)・宮野澄『海軍の逸材 堀悌吉』(光人社、一九九〇年)・末国正雄「堀悌吉」(『軍事研究』二八―七、一九九三年)・芳賀徹ほか『堀悌吉』(大分県教育委員会、二〇〇九年)・長野浩典「堀悌吉試論―その日本近代思想史における位置づけについて―」(『大分県立先哲史料館研究紀要』一六、二〇一一年)・安田晃子「明治期海軍軍人の海外見聞記―堀悌吉「筑波日記」―」(『大分県立歴史博物館研究紀要』一三、二〇一二年)・NHK取材班ほか『山本五十六―戦後七〇年の真実―』(NHK出版、二〇一五年)・筒井清忠「堀悌吉―海軍軍縮派の悲劇―」(『昭和史講義 軍人篇』筑摩書房、二〇一八年)がある。なお以下、大分県立先哲史料館編『堀悌吉資料集 一～三』(大分県教育委員会、二〇〇六～

二〇一七年)は、『堀』一のように略称する。また堀の文章からの引用は、とくに明記しない限り「海軍現役ヲ離ルル迄」(『堀』三)による。

(10) 「一九三四年十二月九日 山本五十六書簡」(『堀』一)。このほか、山本はジャーナリストの伊藤正徳に対して「とにかくあれは海軍の大馬鹿人事だ」と述べている(伊藤正徳『大海軍を想う』文芸春秋新社、一九五六年)。

(11) 一九六七年七月二十一日の談話(防衛研修所編『大本営海軍部・連合艦隊一』朝雲新聞社、一九七五年、二四六頁)。この発言は、嶋田繁太郎「海軍将校中の偉材」(広瀬彦太編『堀悌吉君追悼録』同書編集会、一九五九年。以下、『追悼録』と略称する)における「若し此の不幸がなければ同君は卓抜な海軍大臣として邦家に大功績を立てた事と信ずる」という記述が、この手の追悼本に付きもののお世辞ではないことを明確に示している。

(12) こうした現象に関しては、「陸海軍関係の公文書の組織的な湮滅…、基本史料の不在という状況の下では、戦争史や軍事史の「解釈権」は、いきおい、事情に通じた旧軍関係者、なかでもエリート幕僚将校の手に独占される…。この傾向は、戦後史の早い段階では特に著しい」(吉田裕「軍事関係史料」『近代史料解説・総目次・索引』岩波書店、一九九二年)という指摘を参照。

(13) 高木惣吉『山本五十六と米内光政』文芸春秋新社、一九五〇年。

(14) たとえば実松譲『海軍を斬る』(図書出版社、一九八二年)など。

(15) この時期の注目すべき成果は、野村実「海軍軍令部の権限拡大の歴史と穏健派海軍首脳の離現役」(『歴史のなかの日本海軍』原書房、一九八〇年、初出一九七三年)くらいである。

(16) 太田久元「大角人事再考―その後の海軍の視座として―」『戦間期の日本海軍と統帥権』吉川弘文館、二〇一七年、初出二〇一〇年。なお、以下、『岩村清一日記』の本文は、防衛研究所①中央―日誌回想―七六二～七七三による。

(17) 渡辺滋「日本海軍における出身地と人間関係―堀悌吉の失脚と関連して―」(『山口県立大学大学院論集』二〇、二〇一九年、以下「別稿」)は本稿の補論である。

(18) 軍令部編『昭和六・七年事変海軍戦史』(緑陰書房、二〇〇一年、初出一九三四年)・影山好一郎「第一次上海事変における第三艦隊の編成と陸軍出兵の決定」(『軍事史学』二八―二、一九九二年)・同「第一次上海事変の勃発と第一遣外艦隊司令官塩沢幸一海軍少将の判断」(『政治経済史学』三三三、一九九四年)・同「第一次上海事変の停戦交渉―交渉の難航と海軍、陸軍、外務省の係わり―」(『防衛学研究』三一、二〇〇四年)同「第一次上海事変の勃発の構造―上海侵略と誤認された原因と軍事・外交間の乖離の実相―」(海軍史研究会編『日本海軍史の研究』吉川弘文館、二〇一四年)などを参照。

(19) 野村吉三郎(横須賀鎮守府司令長官)を新設の第三艦隊司令長官に横滑りさせて事変対応の最高責任者としたのは、「末次(信正)大将(第二艦隊司令長官)をやると、事変が拡大するかも知れぬ」と判断されたからである。「一九四六年一月二十二日 座談会」(新名丈夫編『海軍戦争検討会議記録』毎日新聞社、一九七六年)における豊田貞次郎(当時の軍務局長)の証言を参照。

(20) 平松良太「海軍省優位体制の崩壊―第一次上海事変と日本海軍―」(小林道彦ほか編『日本政治史のなかの陸海軍』ミネルヴァ書房、二〇一三年)の指摘するように、事変当時、海軍の中枢を握っていた条約派が対応を誤ったことで権威を失墜し、艦隊派が発言権を拡大するという流れのなかでとらえれば、軍務局長として政策を主導し、また戦隊司令として現場の指揮を担った堀の行動全般が、批判の対象とされた側面も否定はできない。

(21) 上海事変における植松の活躍については、山口喜代松「上海特別陸戦隊の誕生」(『日本海軍陸戦隊史』大新社、一九四三年)に詳しい。成瀬恭「植松錬磨君」(東亜同文会編『続対支回顧録 上』原書房、一九四二年)も参照。

(22) 清水光美証言『提督 上』。

(23) 高橋三吉「自叙伝」高橋信一編『我が海軍と高橋三吉』同人、一九七〇年。

(24) 山県正郷『ある提督の回想録』弘文堂、一九六六年。

(25) たとえば阿武は、伏見宮からの海軍大臣の頭越しの人事要求を飲んでいた(野村 注15論文)。

(26) この史料に関しては、渡辺滋「堀悌吉関連文書との相遇―旧海軍の新出史料の紹介―」(『日本歴史』未定号、二〇一九年)を参照。

(27) 堀には、自分の考えを他人に理解させようとする姿勢が不足していた。堀に私淑する井上成美は、堀の話しぶりを「禅問答」と評しているし(井

上成美証言『提督 下』)、『追悼録』に掲載される友人たちの回想にも同種の指摘が多々見える(たとえば洪泰夫「畏友堀さんを忍ぶ」)。彼のそうした態度は、反対派の不快感を不用意に増幅させていた可能性がある。

(28) 太田 注16論文。

(29) 「先日御話致候書類三通御送り申上候」とあるところによれば、堀側の要望によって提出されたものと考えられる。なお堀の残した記録だけでなく、堀麾下の戦隊で巡洋艦の艦長を務めていた岩村清一もこの期間の日記を付けていた(『岩村清一日記』昭和七年(一九三二)二月三日~四月一日条)。これと堀の「上海事件手記」を併用することで、第三戦隊の動きは明確化するはずである。

(30) 堀と部下との信頼関係については、たとえば大杉守一(戦隊参謀)に対する「一九四九年四月二十八日 弔慰ノ辞」(「備忘録」『堀』二)を参照。同戦隊の谷本馬太郎(由良艦長)は、堀の行動への非難が激しさを増すなかで「司令官の判断処置には一点の非難すべき点はない、現状を認識せず、只堀さんを陥れんが為の非難である」と憤慨していた(松原雅太「追憶」『追悼録』)。岩村清一(阿武隈艦長)も、堀の退役が決定的になった際、「困リシモノ、嫌ナ空気ナリ」(『岩村清一日記』昭和九年十月十九日条)と不快感を示している。

(31) 小林について、詳しくは別稿を参照。

(32) 石川について、詳しくは別稿を参照。

(33) 小林躋造は、一九三一年十二月まで海軍次官として堀の上司だった。伊藤隆ほか編『海軍大将小林躋造覚書』(山川出版社、一九八一年)なども参照。

(34) 戸塚道太郎証言(『提督 上』)にも、稲垣生起(軍令部第一課長)が「堀を首切ることは、加藤さんから既に話がついている」と述べたことが記される。

(35) 四竈と堀の交流の深さは、四竈孝輔『侍従武官日記』(芙蓉書房、一九八〇年)を参照。とくに堀の四竈家訪門の頻度の高さは、驚くほどである。

(36) 嶋田繁太郎「海軍将校中の偉材」『追悼録』。

(37) たとえば田結穣証言(『提督 上』)は、加藤が都合のわるい「覚書」を密かに廃棄したとする。また堀悌吉「資料「倫敦海軍条約締結経緯」の保存に関するメモ」(『堀』一)は、「海軍部内の統制上好まし」くないとして「近く焼却することに決った」重要書類を、古賀峯一が密かに持ち出し、堀に託した経緯を記している。

(38) 「海軍武官進級令」(一九一九年八年制定・翌年公布)によると、中佐以下の進級に関して「海軍大臣を以て議長とし海軍々令部長、各司令長官、司令長官を置かざる艦隊の主席司令官、要港部司令官及び海軍大臣の指定する将官」が議するのが「進級会議」である(十一条)。なお将官への進級に関しては「上旨」(天皇の命令)が必要とされ(十条)、同様のメンバーで「進級候補者名簿」を議するのが最高進級会議である。なお「進級会議組織の改正」(一九二九年七月五日決裁)により、佐官以下の兵科将校の進級を議するメンバーが「元帥 軍事参議官 軍務局長 人事局長 教育局長 航空本部長 海軍次官 軍令部次長 艦政本部長 軍需局長」に変更された後も、将官の「進級候補者名簿」は「艦隊司令長、鎮守府司令長官などの意見」に基づいて決めていた(末国正雄「元人事局員末国正雄手記」『日本海軍史 五』海軍歴史保存会、一九九五年)。

(39) 機能は多岐に渡るが、人事に関しては「海軍将官会議条例」改正(一八九一年)により「高等武官ノ進級候補名簿及進等名簿ヲ議定スル」機能が削除され、以降は官職異動のみを議する場となった。一九三三~四年の段階では大臣(大角岑生)・次官(三三:藤田尚徳/三四:長谷川清)・軍務局長(吉田善吾)・艦政本部長(三三:杉正人/三四:中村良三)・軍令部総長(伏見宮)・横須賀鎮守府司令長官(三三:永野修身/三四:末次信正)で組織されていた。

(40) 左近司政三および清水光美証言(『提督 上』)・中沢佑「人事局長の回顧」(『海軍中将 中沢佑』原書房、一九七九年)。ただし加藤は、この種の会議においても積極的に発言を繰り返し、折々に結論を変更させていた。たとえば一九三一年の場合、最高進級会議でこそ「安藤・西崎・服部の失行を聞く。可ㇾ惜」(『加藤寛治日記』昭和六年十月三十一日条)と、大佐級の退役人事を承認しているが、進級会議の際には「中杉・糀烏を弁護し、中杉一人を昇級に復活す」(同年十月三十日条)と原案を変更させている。

(41) 第一戦隊司令官が左遷ポストでないことは、前後の司令官(村松龍雄・日比野正治など)が別の官職に転任していることからも確認できる。

(42) 秦 注1論文・芳賀ほか 注9著書・長野 注9論文ほか。中将昇進が待命昇進であるとか、軍令部出仕が待命への道筋だとかいう理解自体、翌年に

堀が予備役に編入されたことから遡っての推測にすぎない。

(43) ちなみに待命休職の場合で、予備役に編入されるまでの期間がずば抜けて長いのは、三須宗太郎（大将）の一九一三年十二月待命→翌年十二月予備役という事例である。だたし、これにしても一年を超えてはいない。

(44) 谷口尚真の事例は詳細が判明しないが、出仕の期間はなく、待命と予備役への編入は八年九月に行われている。なお退任の直接の理由としては「大臣室にて東郷元帥より面罵」（第二回特別座談会における及川古志郎の発言／新名丈夫編『海軍戦争検討会議記録』毎日新聞社、一九七六年）・「谷口、元帥より叱責」（『加藤寛治日記』昭和七年二月一日条）という事件が想定されるので、他の条約派将官の退役人事とは区別して考える必要があろう。なお山梨の場合も、すでに実質的な官職を去って軍事参議官の地位にあったので、出仕の期間はなく、一九三三年三月六日に「待命被ニ仰付一」、同十一日に「予備役被ニ仰付一」（「履歴原表」）ということで、待命から予備役まではわずか五日である。

(45) 末国　注38論文によると、当時の将官の予備役編入基準は（1）大将及司令長官たる中将の予備役編入は特別詮議とす／（2）艦隊司令官たる将官…軍令部出仕　四カ月以内　待命四カ月以内　続いて上諭に依り予備役編入　次年度整理者との中間を目途として取扱うを標準とす／（3）要港部司令官、直轄学校長兵科以外の各科先任将官並に海上勤務者…軍令部出仕と待命を合せ四カ月以内　続いて上諭に依り予備役編入　年度末を目途として取扱うを標準とす／（4）其の他の将官…軍令部出仕と待命を合せ一カ月以内　続いて上諭に依り予備役編入／である。

(46) 大角大将伝記刊行会編『男爵大角岑生』海軍有終会、一九四三年。

(47) この記事については、太田　注16論文も参照。

(48) 末国　注38論文。

(49) 吉田善吾「堀君の思出」（『追悼録』）。坂野常善「堀君を憶う」（同）が、「昭和八年末の海軍異動では某要職に就く噂」と述べるのも同様のことだろう。

(50) 堀は、加藤を「元来ノ悪人デハナイ」・「気ノ毒ナ人」（『堀』三）と評する。末次との日常的な接触がなくなった晩年の加藤が山梨と和解していたことは、『加藤寛治大将伝』（伝記編纂会、一九四一年）に彼が寄稿していることからも確認できる。死（一九三九年二月）の直前には、「千歳船橋に山梨勝之進大将を訪て「リンカーン」一巻を返却」（『加藤寛治日記』昭和十三年十一月十八日条）のような交友も復活しており、この訪問については「加藤大将…態々（わざわざ）千歳船橋ノ田舎マデ訪ネテ行キ、長イ間シンミリト話シテ帰ッタ」（『堀』三）とも伝わる。

(51) 大角はドイツ駐在後、一九一二年七月から東郷の副官を十ヶ月勤めた。次の任務までの間、自宅で過ごさせるための温情処置であろう。小笠原長生「東郷元帥と大角大将」（注46著書）も参照。

(52) 山梨勝之進が「東郷元帥が海軍の最高人事に口出したことを、私は東郷さんの晩節のために惜しむ」（実松　注14著書）と述べたのは、こうした構図による。なお東郷の口出しとは、「海軍省人事局第一課長申継綴」（防衛研究所⑧―参考―人事一九三）の「申継一束　昭和六年十二月／岩下大佐に見える「山梨中将ヲ大将親任（ママ）シ対スル東郷元帥ノ意見」（九九七）を指していると思われる。

(53) 小笠原の役割については、田中宏巳「昭和七年前後における東郷グループの活動―小笠原長生日記を通して―」（『防衛大学校紀要　人文科学分冊』五一～五三、一九八五～八六年）・飯島直樹「小笠原長生日記　昭和八年」（『東京大学日本史学研究室紀要』二一、二〇一七年）を参照。

(54) 小林の伏見宮に関する情報は、精度が低かった。たとえば一九三四年八月に伏見宮が加藤を叱責したという情報の場合、「殿下は非常にお怒りになつて、直ちに加藤大将を呼ばれ、政治的策動の甚だけしからんことを二度までも注意」（『西園寺公と政局』四巻三二頁／昭和九年八月六日条）・「総長の宮は加藤を召されて厳重に叱責」（『木戸幸一日記』昭和九年八月二日条）・「総長の宮には痛く御不満にて加藤、末次両将軍に御小言を被仰、加藤大将は余程困却し居るとの事なり」（『牧野伸顕日記』昭和九年八月二十二日条）などとあるのは、いずれも小林→原田と広まった情報である。しかし加藤の側に伏見宮から叱責されたという認識はなく、「御意を伺ひ自信を得」（『加藤寛治日記』昭和九年八月二日条）・「種々御下問に奉答す」（同九日条）という程度に過ぎなかった。

(55) 太田　注16論文。

(56) 嶋田繁太郎「海軍将校中の偉材」『追悼録』。

(57) のちに伏見宮は「私は片耳であった」と述べている（清水光美証言『提

督 上』)。清水光美「軍令部在勤中の思ひ出」(有馬寛編『伏見宮博恭王』御伝記編纂会、一九四八年)は、これを「一方に偏した意見だけを聞いてゐた」といふ意味」と説明する。

(58) 太田 注16論文。

(59) 財部については待命がないまま、一九三二年四月七日に「後備役被二仰付一」。岡田は一九三三年一月九日に待命、同二十一日に「後備役被二仰付一」とある(『履歴原簿』による)。いずれも六五歳を迎えての、大将定年による退役である。

(60) 中村は「加藤寛治ノ四天王」の一人で(『堀』三)、加藤も「私の三羽烏」の一人としていた(坂井景南「加藤大将の慰霊と顕彰」『英傑加藤寛治』ノーベル書房、一九七九年)。ただし加藤との関係はそれほど強くないという意見もある(外崎克久『津軽の濤声―海軍大将中村良三とその時代―』清水弘文堂、一九八八年)。

(61) このことは、野村吉三郎「正義の士」(『追悼録』)の「呉淞砲台を砲撃しなかったことに関して…軍令部総長の宮殿下に堀司令官の悪口を言う者があったので、私は殿下に之を釈明した」という証言からも確認できる。

(62) 当時の米内が条約派の一員とみなされていなかったことについては、手嶋泰伸「一九三〇年代における海軍内の政治的主導権の変遷―伏見宮博恭と米内光政―」(『福井工業高等専門学校 研究紀要(人文・社会科学)』四九、二〇一六年)を参照。

(63) 彼については、赤井克己「岡山市出身、悲運の海軍中将坂野常善」(『おかやま雑学ノート 一〇』吉備人出版、二〇一三年、初出二〇一二年)も参照。坂野が失脚したのは加藤の不興を買った結果で(坂野常善『大東亜戦争ノ教訓』坂野常和、一九八五年)、その口実とされた「失言」も末次に近い新聞記者が作り上げたものだった(杉本健『海軍の昭和史』文芸春秋、一九八二年)。

(64) 「枝原来り妥協を解く[説]」(『加藤寛治日記』昭和七年十二月三日条)・「枝原来り、小林・末次提携を談ず」(同 昭和八年一月九日条)などの記事によれば、枝原は条約派との融和を説く人物だった。将来の大将候補と目されていたという伊藤金次郎「次官時代の長谷川」(注7著書)の指摘や、「秀才」・「識見の高い方」という評価(新見政一「自伝」『提督 新見政一』原書房、一九九五年)も参照。

(65) 海軍の停限年齢は大将六五歳・中将六〇歳・少将五六歳なので(「海軍武官服役令」第八条)、最年長の枝原でも定年までまだ六年近くあった。

(66) 「色々の事情で枝原がやめることに成ったので長谷川(清、枝原の同期)次官あたりから、そんなら堀もやめさせろと云ひだした」・「長谷川ガ次官ニナルトキ、加藤大将カラ堀ヲ復職サセヌ様ニシロト云ハレテ居タ」という堀の証言も踏まえると、長谷川が両派の痛み分け的な落としどころを求めた可能性が想定できる。長谷川の立ち位置については別稿を参照。なお御薗生翁甫編『続防府市史』(刊行会、一九六〇年)などによれば、枝原の退役理由は航空兵力の拡張をめぐり大臣と衝突したことにあるとされる。

(67) 寺島は堀のフランス駐在の後任となる頃から後塵を拝し、思うところも生じたらしい。軍縮会議の際には「寺島海軍省先任副官ガ、自分ヲ叱責スル様ナ大臣電報案ヲ起草シテ回覧ニ附シテ居タ」というし、上海事変の後には「自分等ノ悪口ヤ噂」を集めて「尾鰭ヲツケテ金棒ヲ曳キナガラ鎮守府ナドニ迄歩キ廻ッテ喋ッテ居タ」(『堀』三)とされる。一九四二年には、酔った寺島(東条内閣の逓信大臣)が民間の会食へ乱入し、「倒閣運動ヲヤッテ居ル奴ガアル。…(次デ余ヲ指シ)ソコニモ居ヤガル」(『堀』三)と罵っている。

(68) 大角は「酒量は却々人に譲らざる豪の者」(注46著書)とされるほど、酒に強かった。

(69) 寺島健「堀悌吉君を憶う」『追悼録』。

(70) 口実を真に受けた加藤が早速揮毫したにもかかわらず(同二月四日条)、末次は結局それを取りに来ず、加藤は訝しんでいる(同二月五日条)。

(71) 竹内賀久治伝刊行会編『竹内賀久治伝』(酒井書房、一九六〇年)によれば、一九三三年頃、「加藤提督は…平沼男を顧みて、『平沼さんはいいが、くっついている者がいけないよ』と、竹内先生を顎でしゃくって言った」という。

(72) 末次が、二・二六事件に際して叛乱軍の徹底鎮圧を強硬に主張し続けたのは(『加藤寛治日記』同年二月二十七日条・『真崎甚三郎日記』同年三月十二日条ほか)、こうした状況から逃れるためであろう。なお石川信吾が退役を免れたのは、同郷の岡敬純が強く庇ったからとされる(詳しくは別稿を参照)

(73) たとえば二・二六事件の際、叛乱軍鎮圧に反対する加藤に対し、伏見宮は「徹底的ニ処置スルヲ要ス」と申し渡している(「昭和十一年二月二十七日 備忘録」軍事史学会編『嶋田繁太郎備忘録・日記 I』錦正社、二〇一七年)。

(74) 和波豊一「珍しき存在」『追悼録』。

(75) 伊藤隆編『高木惣吉 日記と情報 上』みすず書房、二〇〇〇年。

(76) 戦争調査会における堀の証言については、井上寿一『戦争調査会 幻の政府文書を読み解く』(講談社、二〇一七年)を参照。

(77) 広瀬順晧監修『戦争調査会事務局書類 一五』(ゆまに書房、二〇一六年)に「堀悌吉講演要旨」・「堀悌吉氏に対する質問応答速記」が含まれる。前者のみ「倫敦条約と統帥権問題」(『堀』一)に活字化されているが、後者における堀の見解は大変興味深い。

(78) ジェイムス・アワー／妹尾作太男訳「日本における海上兵力の歴史」『よみがえる日本海軍 上』時事通信社、一九七二年。

(79) 細谷千博「ダレス・吉田交渉」『サンフランシスコ講和への道』中央公論社、一九八四年。

(80) 実松穣「シーメンス事件」『あゝ日本海軍 下』光人社、一九七七年。

(81) 野村実「ロンドン軍縮条約をめぐる対立」『天皇・伏見宮と日本海軍』文芸春秋、一九八八年。

昭和初年における海軍条約派の退潮
―堀悌吉中将の失脚過程を中心として―

1933 ～ 34年にかけて、海軍部内で当時の大臣の名前に由来する「大角（おおすみ）人事」と称される大規模な更迭人事が行われた。この人事の最後に位置したのが、堀悌吉（ていきち）中将の退役人事である。本稿では、当時の海軍部内における条約派（国際協調派）と艦隊派（対外強硬派）のせめぎ合いのなか、前者の中心人物で海軍きっての逸材といわれた堀が、最終的に退役に追い込まれるまでの過程を、学界未紹介の史料なども使いながら、検討していく。

The Decline of Joyakuha in the Beginning Years of Showa: With a Focus on the Downfall Process of Vice Admiral Teikichi Hori

From 1934 to 1934 the Japanese Navy proceeded massive sweeping changes of their officials. This personnel change process was called “Osumi Jinji”, named from the Minister of the time. The last case in this process was the retirement affair of Vice Admiral Teikichi Hori. He was evaluated as one of the most talented officers in the Navy and belonged to “Joyakuha” (moderate faction). Then there was an antagonism between this Joyakuha and “Kantaiha” (the hard-liners). This paper traces the process that Hori was eventually forced to retire in the rivalry relations of two schools.